

書 評

Ives, Jack D. 著『*Baffin Island: Field Research and High Arctic Adventure, 1961-67*』University of Calgary Press, 2016年発行, 234 ページ, ISBN-10: 1552388298, ISBN-13: 978-1552388297

著者の現在の肩書きは、カールトン大学の地理学・環境学の教授であり、国連大学の山岳生態学および持続可能な開発に関する上級顧問を務めている。1953年に英国ノッティンガム大を卒業後、1954年に正式にカナダに移住し、1956年にはカナダのマクギル大で学位を取得。マクギル大で地理学を教えた後、本書に描かれている1961年から1967年にかけて、カナダ・エネルギー・鉱山資源省地理部門のディレクターを務めた。その後、米国・コロラド大学に移り、学術雑誌「*Arctic and Alpine Research*（現在の *Arctic, Antarctic, and Alpine Research* 誌）」および「*Mountain Research and Development*」を設立するとともに、同大学の地理学科教授に就任。1989年からはカリフォルニア大学デービス校教授となり、学部長などを歴任した。1978年から2000年まで、国連大学のマウンテンエコロジーと持続可能な開発に関するプロジェクトのための研究コーディネーターを務めた。これまでに、氏の研究成果や環境への貢献に対して世界各国からの多くの栄誉が授与されている。

上記の経歴が示すとおり、著者は、北極圏カナダでの豊富な研究経験を持つ地理学者である。カナダ政府の仕事に就いていた1960年代にバフィン島を訪れ、7年間にわたる調査プロジェクトを指揮した。本書はその記録である。

いきなり本書とは離れてしまい恐縮だが、ノーベル物理学賞受賞者のスティーヴン・ワインバーグの著書『*To Explain the World: The Discovery of Modern Science*』の邦訳が「科学の発見」と題してこの春に出版された。「本書は不遜な歴史書だ」という衝撃的なキャッチフレーズで紹介されているように、歴史学の世界では禁じ手とされる「現在の基準で過去を裁く」というアプローチによって、科学の進歩の歴史をたどりながらその意義を理解するために書かれた異色の科学史書である。欧米では、科学者だけでなく、歴史学者や哲学者をも巻きこんだ大論争をまきおこして話題となった。その噂を聞きつけていた私は、邦訳が出版されたということで、すかさず書店に足を運んで入手した。平積みされていた邦訳の表紙には、天球儀を見つめる学者を描いた「天文学者」というフェルメールの名画があらわれていて、私などは、その姉妹作である「地理学者」のほうをついつい連想してしまった。科学の王道と本書が評する物理学とは縁遠い私であるにもかかわらず、思わず親近感を抱かせてくれたその出会い体

験が、いまだに後を引いている。じつは、本書『*Baffin Island*』の書評の話をもちかけられた時期は、この「科学の発見」をむさぼり読んでいた時期と偶然にも重なってしまうことになった。フェルメールの「地理学者」を起想した出会いから「科学の発見」に傾注してしまっていた私には、どうしてもその文脈で『*Baffin Island*』を読み進めざるを得ない心理状況におかれてしまったのである。まずは、そのような。評者自身の個人的な実情があることをお断りしておかなければならない。

さて、本書にもどろう。1960年代に手掛けたバフィン島の調査プロジェクトを振り返っている本書は、ある意味では科学史の側面も持ち合わせている。それよりも、著者ご自身が「極域・高山域地理学の父」とも称される方だけに、ご自身が当該分野の歴史であるといっても過言ではない。いずれにしても、大家として名高い著者が、今この時点で半世紀前の当時を振り返る本書を執筆・出版されたことは、受け取り方次第では様々に解釈することが可能なのである。それだけに、一編通りの書評で済ませてしまおうと原稿に向かうこと自体が、かなり敷居の高いこととして感じられてしまうことになってしまった。

特に、「半世紀」というのはけっこう微妙な時間である。著者自身をはじめとして、関係者の何割かはまだ存命であり、直接の後継者たちの多くは、まさに現役として活躍中の世代だ。なかには、本書に記録されている経緯の「その後」を担っている人物も少なくないはずである。その一方で、進展のめまぐるしい科学の世界にあっては、この半世紀に得られた新知見や新しい概念の創出は、科学史の一部としてすでに語られ始めているし、分野によっては、進展規模の大きさから、科学史物語の中で主要な位置を占めている場合すらある。「科学の発見」との文脈でいえば、「ウィッグ史観」と呼ばれる歴史学の研究での禁じ手、つまり「現在の基準で過去を裁く」こと、への批判は、本書の書きぶりそのものにも適用されうるし、その評者にも適用されうる。ましてや、関係者が存命中に、科学的視点で評することは、現在進行形で論争されている課題に対してもコミットすることになるため、相応の先端知識をもってしなければなし得ないことでもある。

では、極域自然地理学の進展の中で本書を語るとすれば、どのように位置づけられるであろうか？冷戦真っ只中の北極圏において、実績も経歴もままならない若者達が、科学的に前人未踏の地に新たな研究プロジェクトを展開しようと企てた一連の記録。そのように捕らえれば、本書は、ヘディン、ハイエルダール、シャクルトンらにも匹敵する、一級の探検記録として読むことができるだろう。ただ、時代はすでに宇宙ま

で人類が進出しはじめていた時期に入っていた。アポロ 11 号で月面に人類の第一歩が記されたのは 1969 年のことであり、本書が扱う年代の直後に当たっている。航空機による移動や輸送は大衆化され、本書にも随所で述べられているように、DEW ライン（遠距離早期警戒線）のために、北極圏の荒野の各地には短期間のうちに近代的な警戒監視設備が構築され、ある種の「文明のオアシス」が凍てついた大地に出現する事態となっていた。そのようなバックボーンに支えられて、本書のプロジェクトが実現していくこととなる。今になって思えば、すでに偵察衛星は、世界各地の地表面をくまなく高解像度で撮影することに成功していた。しかし当時それらは最高機密情報であり、末端の市井の研究者が入手することなどはほぼ不可能な時代である。かわって本書では、空中写真が最新の情報源技術として重宝がられている。もちろん、その情報であっても、北極圏航路探索時代以来の地理情報からすれば格段に上質なものであり、後氷期に氷床から解放された陸域の地形発達史を読み解く上で、重要な資料となったことはいうまでもない。

そのような極域の近代化事情の中にあっても、自然地理学の進展に照らしてみれば、依然として 1930 年代の調査資料や見識に頼らざるを得ない状況にあったこと、氷床の拡大域や衰退プロセスの解明が、限られた現地情報に基づいて議論されていたこと、比較的進んでいたスカンジナビア半島の成果を参照して、そのミラーイメージで語られていたことなど、遠く極東の日本の氷河地形コミュニティの中で育ってきた評者にとっては、認識を新たにせざるを得ない注目点が目白押しである。さらに、21 世紀の現在からみて隔世の感を覚えるのは、「on the job training」として現在では一般的となった、研究プロジェクトの中で学生を育てる、という試みをいち早く導入していることである。加えて、フィールド調査に女性の参画を促して、政府主導の研究プロジェクトに男女機会均等の思想を導入している。こうした、研究を取り巻く様々な社会状況に変革をもたらしていることも注目に値する。

本書の科学的な大目標として、ローレンタイド氷床単一ドーム仮説に、現場の証拠を積み重ねて反論していく様子が描かれている。この仮説は、氷河地形の古典的教科書の著者として我が国でも有名な Flint 教授が当時提唱していたものであり、大家の高名な説に新進気鋭の若者が挑んでいく、というストーリーとしては、血湧き肉躍る、野外調査研究の醍醐味と面白さを伝える一級の啓蒙書として評価できるだろう。一方で、「ウィッグ史観」のクリティカルシンキング的視点を持って本書を読み進めた場合、当時の学術的到達点としての限界を率直に記述できているのか、という点や、その後の後知恵で補強されている部分を払拭できるのか、という疑問は残らざるを得ないのが正直な感想である。一方で、本書から新たに学ぶべきことも多かっただけに、なかなか評しづらい側面でもある。これは、ひとえに評者の不学に帰するポイントである。

同時期の日本といえば、南極観測が継続的に実施できる体制を整えつつあった時期にあたり、1968 年には念願の極点往復旅行を果たしている。南極氷床変動の解明というテーマは、当時から南極観測隊に課せられた大きな使命でもあり、現在までも継続して続けられている。実物の氷河を対象とした研究がまだまだ難しく、その経験を有する研究者自体が少なかった当時の日本において、氷床周辺の地形発達解明に携わった研究者達の素養は、どのように培われていたのだろうか？私は、彼らの後継としてその課題を引き継ぐ仕事に携わる機会を得てきたが、そのような流れの末端に位置するものとして、あえて「ウィッグ史観」の禁を犯して当時を解釈させてもらえば、Flint あるいは Embleton and King の古典的教科書を読み、と教えられた、あの氷河地形学の世界観とは、一線を画すコンセプトが必要だったように思われて仕方が無い。まだ存命の先達が多いとはいえ、その率直な質問をご本人らにぶつけてみたことはまだない。でも「教科書はほとんど頼りにはならなかったよ」とか「なにがしかのギャップを感じながらも誰もまだやったことのない仕事としてフロンティアを感じつつ取り組んできた」との回答を大いに期待したいと思っている。

このような感覚は、文献からの学習ではなかなか伝わりづらい。ポストグラシアルリバウンドに起因する隆起汀線への着目、氷床縁の後退前縁の湖沼の発達、モレーンやカールなどの山岳氷河では典型的な氷河地形のアナロジーが直接適用できるわけではない、ヌタタクの発達史解明のために山地の平頂部にぜひともたどり着きたいという欲求、頼りしていた飛行機やヘリコプターのオペレーションにつきもの予測不能な性質、といった極域氷床地形調査特有の実情などなど、極域のフィールドで直面する現場感覚は、私自身、南極やグリーンランドのフィールドを 20 年あまり積み重ねてきて、ようやくそのユニークさに気づくようになったところである。それは一方で、学生時代に勧められた古典的教科書にどことなく感じていた「違和感」のようなものの正体がなんだったのか、に思い当たることの裏返しでもあった。

本書『Baffin Island』は、そのような意味で、まさに現場の感覚をダイレクトに伝えることができるリアリティに満ちている。私自身、カナダや北欧の研究者が半世紀前から共有していた現場感覚や学説論争上の氷床観といったものを、おそまきながら、本書を通じて初めて知ることができた。その一方で、我が国の研究者の多くも世界に互して第一線で活躍している近年の第四紀氷床変動研究が、アイスコア分析、同位体解析、数値シミュレーションといった新興の分野に主役の座を譲りつつあるようにも見えることにも思いが及ぶのである。それらの分野にとっては、地形発達史の視点に基づく現場感覚は、どのように思われているのだろうか？もしかしたら、なにそれ？と一蹴されてしまうのではないか、との危惧さえ覚えてしまうのが偽らざる心境なのである。

それだからこそ、本書を通じて、半世紀前から変わらぬ現場感覚に思いを寄せ、フィールドに基づく地形学の進展と、周辺関連領域との協調関係について再考する機会につなげられれば、と思っているところである。

冊子体での販売もあるが、WebサイトでPDF版 (<http://press.ucalgary.ca/books/9781552388297>) が無償で公開されている。本書を読み進めるには、氷河学などの専門に精通する必要はない。サイエンスとアドベンチャーの間を行ったり来たりしながら気軽に読み進めていただくことができるだろう。

文献

Embleton, C. and King, C. (1968): *Glacial and Periglacial Geomorphology*. Hodder & Stoughton Educ., Loondon.

Flint, R. F. (1957): *Glacial and Pleistocene Geology*. John Wiley & Sons, Inc., New York.

(澤柿 教伸)